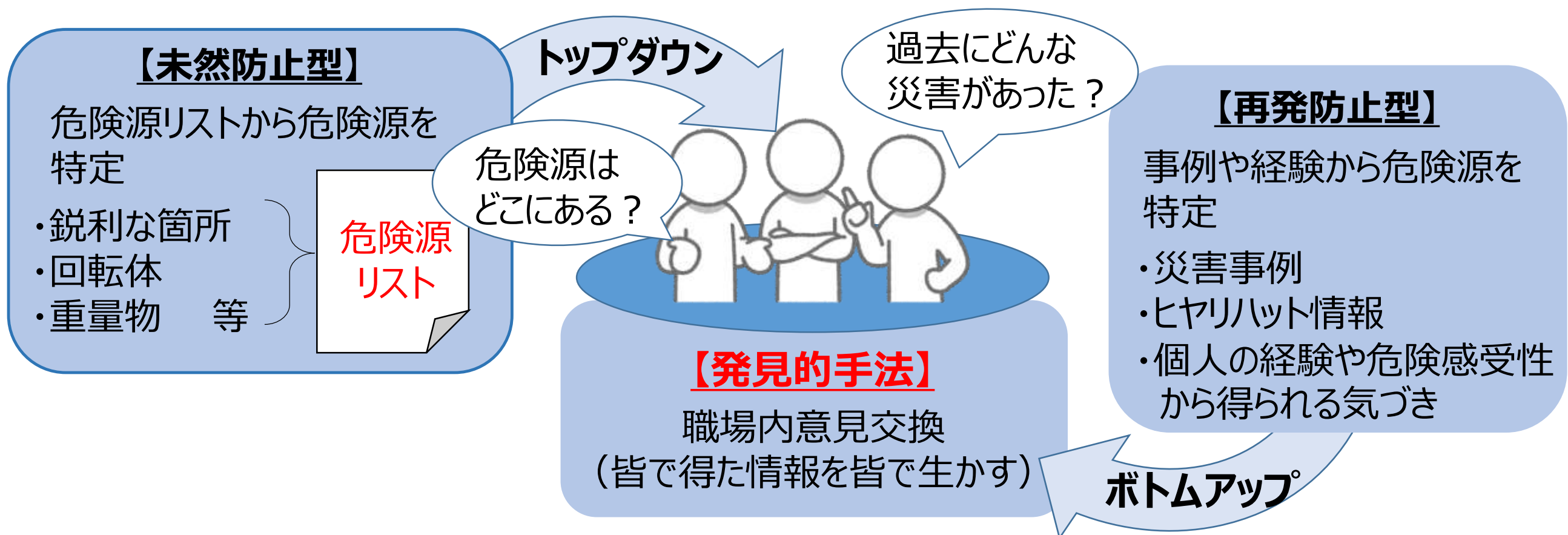


# 官民協議会 向殿サブワーキンググループ

2022年9月9日（金）開催

# 1. 2022年度向殿サブWGの活動内容について

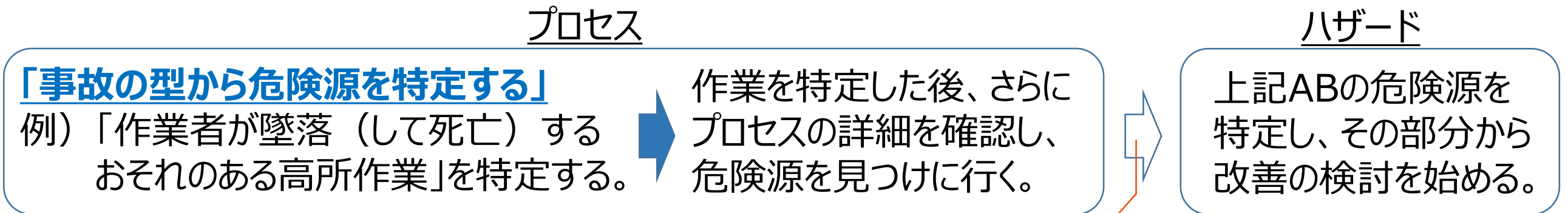
リスクアセスメントの危険源の特定において、各業種からの事例をもとに、共通手法を探る。2021年度までのWGにおいて、網羅的なリスクアセスメント実施には職場での意見交換による「**発見的手法**」が有効であり、そのためには「わかりやすい危険源リスト」の用意と、「職場で意見交換を行うためのコミュニケーションツール」の2つが大切であるとの意見にまとめ、まずは各社における「コミュニケーションツール」の紹介を行った。2022年度は昨年度に引き続き「代表的な危険源リスト」の作成・提案を進める。



## 2. 活動詳細：「危険源」をもっとイメージしやすく（代表的な危険源リスト作成）

【実際に多く行われている※RA（事故の型を用いたRA）】※2020年調査結果より

**再発防止的観点（ボトムアップ型）**：過去の類災や結果に学ぶ



この部分が進まないと危険源が特定できず漏れてしまう可能性がある。危険源に結びつけ、網羅的なRAへ確実に繋げたい。（想定できなかった災害は未然防止できない）

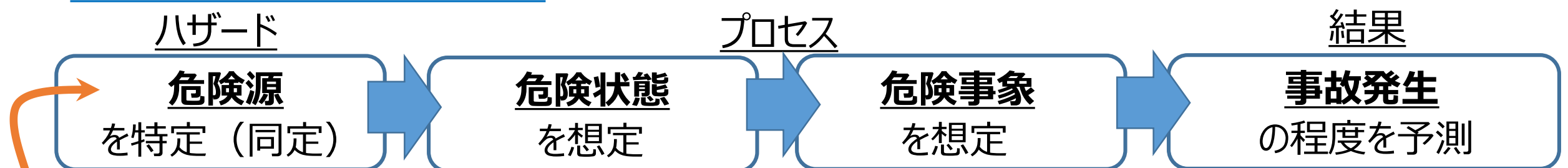
### 【危険源（ハザード）から始めるRA】

リスクアセスメントのステップ（下記①～②）に基づく評価

- ① ハザード（危害を引き起こす潜在的根源）を明らかにすること
  - ② リスク見積もりにつなげるために、ハザードごとに、ケガに至るプロセスを明らかにすること
- ※ ①と②は表裏一体（②から①が明らかになることもある）

**未然防止的観点（トップダウン型）**：論理的、網羅的、物理現象から探す

⇒ **「危険源を網羅的に特定する」**



RAのスタートとなる危険源を特定しやすいように、イメージしやすい具体的な着眼点（設備や工具・作業環境等）を一覧化し提供。

### 3. 活動詳細：「危険源」をもっとイメージしやすく（危険源リスト作成）

各社事例をもとに、設備や工具・作業等に、どういった危険源が潜んでいるのか判断しやすい危険源一覧を作成する。作成した一覧は、各社の実状に応じて改編し活用する。

#### 【活動内容】 具体的な設備等に対する危険源一覧作成

- ① JISにある「危険源の型」を、わかりやすくイメージしやすいワードに変換。
- ② 変換した「危険源の型」から、関係する設備や工具・作業等の具体的な名称を各団体を通じて情報収集。（9団体、43社から回答）
- ③ 具体的な設備や工具等の名称を左列に整理し、それぞれに対応する危険源リストを作成。

ご協力いただき  
ありがとうございます。  
ございます。

#### 【作成リスト（イメージ）】

① 危険源の型		具体例		
		機械・設備	工具、原材料、製品、副産物	作業、環境
機械・器具等に係る危険源				
回転している箇所				
伸縮・上下運動する箇所（隙間が狭くなる箇所）				
鋭利な箇所				

記入（追加）

逆引きに  
組みなおす。

50音	機械・設備	危険源の型		
か	攪拌機 <span style="color: red; font-weight: bold;">整理</span>	回転している箇所		
ぐ	グラインダー	回転している箇所		
し	シリンダー	伸縮・上下運動する箇所（隙間が狭くなる箇所）		
せ	旋盤	回転している箇所	鋭利な箇所	

ひとつの設備や工具等に対し、複数の危険源がある場合も考慮。漏れの低減につなげる。

#### 【作成リストの活用方法】

作成した本リストを一例とし、詳細な設備名称や危険源を現場目線で追記することで、各社の実状に沿った「危険源一覧表」にすることができる。

# 危険源調査 途中経過報告

## 【調査内容】

「危険源につながるキーワードから具体的な設備等を例出するためのリスト」を作成するための情報提供。

危険源を設備、工具、作業等の視点で横広に見出すため設備等を記載することで、危険源と設備等をつなげ、危険な設備等の見落としを防ぐ。

ただし、設備等は各業界・各社によって大きく異なり数も非常に多くなることが予想されるので、今回は代表的なものに限る。

## 【調査期間】

7/28～9/1

## 【回答数】

44件（9団体）

## 【進捗】

リスト化を順次実施、現在10件終了。  
年内完了、年度内配信を目標。

# 危険源調査 途中経過報告

## 【担当の気づき】

- ① 設備や工具・作業（以下、設備等）名称の多様さ
  - ・当然のことながら、多くの設備等が挙げられている。
  - ・今回は「代表的」なものなので特殊な名称は少ないが、改めて現場に危険源が多いことを実感し、現場がその認識でいることも実感。
  - ・一方、それだけのものひとつずつにRAを行っているか、行うとすると時間が非常にかかることを改めて懸念。
  
- ② 担当だけでは気づけなかった、設備等に存在する危険源
  - ・具体例「バッテリー」…爆発の危険源（AGV充電ステーションは水素発生）
  
- ③ 担当が感じた、設備等に存在する危険源の漏れ
  - ・具体例「ウインチ」…「重量物取り扱い」として挙がるが「回転体」としては挙がらず
  - ・具体例「複数人作業」…「重量物取り扱い」「不安定な重量物」「共同作業」と複数の危険源キーワードに該当するが、一般的にその認識はありRAに反映されているか
  
- ④ 危険源に対する認識の違いや誤解の存在
  - ・具体例「保護具」…眼鏡の破損等を予想してのことだが、誤解
  - ・具体例「メッキ液作業」…この場合、メッキ液が危険源
  - ・問い合わせにおける質問「グラインダーに危険源は無い」  
…グラインダーの刃は作業時に出ていて当然のため、RA対象ではない、というご意見